

これから数週はベクトル解析の学習をおこなう。今後特に断らない限り、

- 3次元直交座標系 (右手系) を考える
- $x, y, z$  成分を 1, 2, 3 成分あるいは  $x_1, x_2, x_3$  成分ともあらわす
- $i, j, k$  はそれぞれ 3次元直交座標系の基本ベクトルをあらわす (問題 3)。これを  $e_x, e_y, e_z$  あるいは  $e_1, e_2, e_3$  ともあらわす
- 和の規約 (N0.3 問題 6) を用いる
- ベクトル  $a = (a_1, a_2, a_3)$  の長さ  $|a|$  を  $|a| = \sqrt{a_i a_i}$  と定義する

1. (内積) 2つのベクトル  $a, b$  の内積  $a \cdot b$  を次式で定義する

$$a \cdot b = |a||b| \cos \theta.$$

このとき以下の問いに答えよ。

- (1)  $a \cdot b$  を  $a, b$  の成分を用いて表せ。
- (2) 内積はスカラー積とも呼ばれる。スカラー量とは i) 座標それぞれの点に対して一つの数値で表され, ii) 座標回転に対して不変な量のことを言う。内積がスカラー量であることを成分計算により示せ。

2. (外積) 線形独立な 2つのベクトル  $a, b$  に対し, 第 3 のベクトルが次の性質を持つものとする。

- i)  $a$  と  $b$  ととも直交する
- ii) 長さは  $a, b$  の張る平行四辺形の面積に等しい
- iii)  $a, b$ , 第 3 のベクトルは右手系をなす

このように定めたベクトルを  $a, b$  の外積と呼び,  $a \times b$  と記す。このとき以下の問いに答えよ。

- (1) 外積を成分で表すと  $(a \times b)_i = \varepsilon_{ijk} a_j b_k$  と書き下すことができる。ここで添字  $i$  ( $i = 1, 2, 3$ ) は各ベクトルの  $i$  成分を表す。これが上記 i) - iii) の性質を満たしていることを示せ。

(2) ベクトル  $a, b, c$  の張る平行 6 面体の体積は  $|(a \times b) \cdot c|$  で表されることを示せ .

(3)  $bac$  公式  $a \times (b \times c) = b(a \cdot c) - c(a \cdot b)$  を証明せよ .

3. (勾配) 3次元直交座標系の基本ベクトルを  $i, j, k$  とする .  $i, j, k$  は , それぞれ  $x, y, z$  (または  $1, 2, 3$ ) 軸の正の向きを持ち , 大きさは 1 である .  $x, y, z$  のスカラー関数  $f = f(x, y, z)$  がある時 , 点  $P(x, y, z)$  における  $f$  の勾配ベクトル  $\text{grad } f$  は

$$\text{grad } f = \frac{\partial f}{\partial x} i + \frac{\partial f}{\partial y} j + \frac{\partial f}{\partial z} k$$

で定義される .  $\text{grad}$  はグラジェントやグラッドと発音する . ハミルトンの演算子

$$\nabla = i \frac{\partial}{\partial x} + j \frac{\partial}{\partial y} + k \frac{\partial}{\partial z}$$

を用いると

$$\text{grad } f = \nabla f$$

とも表される .  $\nabla$  はナブラと呼ぶ . このとき以下の問いに答えよ .

(1) 固定点  $P$  から一定の微小距離に点  $Q$  がある . ただし  $\overrightarrow{PQ}$  の方向は様々にとれるものとする . 点  $P$  から点  $Q$  に移動した時に  $f$  の値の変化が最大になるのは ,  $\overrightarrow{PQ}$  が点  $P$  における  $\text{grad } f$  に平行な場合であることを示せ .

(2)  $\text{grad } f = e_i \frac{\partial f}{\partial x_i}$  とも表せることを示せ .

(3)  $g$  をもう一つのスカラー関数とする時 , 以下の恒等式が成り立つことを示せ .

(i)  $\nabla(af + bg) = a\nabla f + b\nabla g$  ( $a, b$  定数)

(ii)  $\nabla(fg) = g\nabla f + f\nabla g$

(iii)  $\nabla\left(\frac{f}{g}\right) = \frac{g\nabla f - f\nabla g}{g^2}$

(iv)  $\nabla(f(g)) = \frac{\partial f}{\partial g} \nabla g$

4. (勾配の具体例) 以下の2次元直交空間  $(x, y)$  におけるスカラー関数  $f = f(x, y)$  について, i)  $\text{grad } f = \frac{\partial f}{\partial x} \mathbf{i} + \frac{\partial f}{\partial y} \mathbf{j}$  を求め, ii) 幾つかの等高線  $f = \text{一定}$  を図示し, 等高線上の幾つかの点において  $\text{grad } f$  を矢印で表せ.

(1)  $f = 2x - 3y$     (2)  $f = y/x$     (3)  $f = xy$     (4)  $f = 4x^2 + 9y^2$

5. ( $r$  の勾配) 位置ベクトル  $\mathbf{r} = x\mathbf{i} + y\mathbf{j} + z\mathbf{k}$  について,  $r = |\mathbf{r}|$  と置く. このとき次の等式を証明せよ.

(1)  $\nabla r = \frac{\mathbf{r}}{r}$     (2)  $\nabla f(r) = f' \frac{\mathbf{r}}{r}$     (3)  $\nabla \left( \frac{1}{r} \right) = -\frac{\mathbf{r}}{r^3}$     (4)  $\nabla \log r = \frac{\mathbf{r}}{r^2}$

6. (保存力) 力  $\mathbf{F}$  があるスカラー関数  $U$  を用いて  $\mathbf{F} = -\text{grad } U$  と書けるとき,  $\mathbf{F}$  は保存力と呼ばれる. 質点  $m$  が保存力  $\mathbf{F}$  のもとで運動するとき, 運動エネルギーと  $U$  の和は一定に保たれることを示せ.

7. (方向微分)  $\mathbf{u} = (l, m, n)$  を単位ベクトルとする. このとき極限值

$$\lim_{\Delta s \rightarrow 0} \frac{f(x + l\Delta s, y + m\Delta s, z + n\Delta s) - f(x, y, z)}{\Delta s}$$

を  $f$  の  $\mathbf{u}$  方向の方向微分係数といい,  $\frac{\partial f}{\partial \mathbf{u}}$  と記す. このとき以下の問いに答えよ.

(1)  $\frac{\partial f}{\partial \mathbf{u}} = \mathbf{u} \cdot \text{grad } f$  を証明せよ.

(2)  $\left| \frac{\partial f}{\partial \mathbf{u}} \right| \leq |\text{grad } f|$  を証明せよ. また等号が成り立つのはどのような時か示せ.

8. (発散) 各成分が座標の関数となっているベクトル

$$\mathbf{A} = a_1(x, y, z)\mathbf{i} + a_2(x, y, z)\mathbf{j} + a_3(x, y, z)\mathbf{k}$$

を考える (このとき  $\mathbf{A}$  をベクトル場と呼ぶ) .  $\mathbf{A}$  の発散  $\operatorname{div} \mathbf{A}$  を

$$\begin{aligned}\operatorname{div} \mathbf{A} &= \frac{\partial a_1}{\partial x} + \frac{\partial a_2}{\partial y} + \frac{\partial a_3}{\partial z} \\ &= \frac{\partial a_i}{\partial x_i}\end{aligned}$$

で定義する .  $\operatorname{div}$  はダイバージェンスと発音する . このとき以下の問いに答えよ .

- (1) ハミルトンの演算子を用いると  $\operatorname{div} \mathbf{A} = \nabla \cdot \mathbf{A}$  ともあらわせることを示せ .
- (2)  $\varphi = \varphi(x, y, z)$  をスカラー関数とする時 , 等式  $\operatorname{div} (\varphi \mathbf{A}) = (\operatorname{grad} \varphi) \cdot \mathbf{A} + \varphi \operatorname{div} \mathbf{A}$  を証明せよ .
- (3) 等式  $\operatorname{div} (\operatorname{grad} \varphi) = \frac{\partial^2 \varphi}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \varphi}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 \varphi}{\partial z^2}$  を証明せよ .

$\operatorname{div} (\operatorname{grad} \varphi)$  は  $\nabla \cdot (\nabla \varphi) = \nabla^2 \varphi = \Delta \varphi$  といろいろな書き方をする . 記号  $\Delta$  はラプラシアンと呼ぶ .

9. (発散の解釈) 流体が点  $P(x, y, z)$  において速度  $\mathbf{v}(x, y, z)$  を持つものとする .  $P$  を中心とし各稜の長さが  $\Delta x, \Delta y, \Delta z$  の小さな直方体を考える . ここで各稜はそれぞれ  $x, y, z$  軸に平行である . この直方体から単位時間に流出する流体の総体積は近似的に

$$(\operatorname{div} \mathbf{v}) \Delta x \Delta y \Delta z$$

で与えられることを示せ .

10. (回転) ベクトル場  $\mathbf{A}$  の回転  $\text{rot } \mathbf{A}$  は

$$\text{rot } \mathbf{A} = \left( \frac{\partial a_3}{\partial y} - \frac{\partial a_2}{\partial z} \right) \mathbf{i} + \left( \frac{\partial a_1}{\partial z} - \frac{\partial a_3}{\partial x} \right) \mathbf{j} + \left( \frac{\partial a_2}{\partial x} - \frac{\partial a_1}{\partial y} \right) \mathbf{k}$$

と定義される．行列式の算法を利用すると

$$\text{rot } \mathbf{A} = \begin{vmatrix} \mathbf{i} & \mathbf{j} & \mathbf{k} \\ \frac{\partial}{\partial x} & \frac{\partial}{\partial y} & \frac{\partial}{\partial z} \\ a_1 & a_2 & a_3 \end{vmatrix}$$

とも表現できる．rot はローテーションまたはロートと発音する．これを curl (カール) と記す場合もある．以下の問いに答えよ．

- (1) ハミルトンの演算子を用いると  $\text{rot } \mathbf{A} = \nabla \times \mathbf{A}$  とあらわせることを示せ．
- (2)  $\text{rot } \mathbf{A}$  の成分を  $\varepsilon_{ijk}$  を用いた記法で表せ．
- (3)  $f$  をスカラー関数とする時,  $\text{rot}(\text{grad } f) = 0$  を証明せよ．
- (4)  $\text{div}(\text{rot } \mathbf{A}) = 0$  を証明せよ．
- (5)  $\text{rot}(f\mathbf{A}) = (\text{grad } f) \times \mathbf{A} + f\text{rot } \mathbf{A}$  を示せ．

11. ( $\text{rot rot } \mathbf{A}$ )

- (1)  $\nabla \times (\nabla \times \mathbf{A}) = \nabla(\nabla \cdot \mathbf{A}) - \Delta \mathbf{A}$  を証明せよ．
- (2)  $\mathbf{H}, \mathbf{E}$  が  $x, y, z, t$  のベクトル関数で

$$\begin{aligned} \text{div } \mathbf{E} &= 0 & \text{div } \mathbf{H} &= 0 \\ \text{rot } \mathbf{E} &= -\frac{1}{c} \frac{\partial \mathbf{H}}{\partial t} & \text{rot } \mathbf{H} &= \frac{1}{c} \frac{\partial \mathbf{E}}{\partial t} \end{aligned}$$

を満たすならば,  $\mathbf{E}$  と  $\mathbf{H}$  は以下の波動方程式を満たすことを示せ．

$$\frac{\partial^2 \mathbf{E}}{\partial t^2} = c^2 \nabla^2 \mathbf{E} \quad \frac{\partial^2 \mathbf{H}}{\partial t^2} = c^2 \nabla^2 \mathbf{H}$$

12. (回転の意味) 原点を通る固定軸のまわりに剛体が回転運動をしている．

- (1) 角速度ベクトルを  $\boldsymbol{\Omega}$ , 各位置  $\mathbf{r} = (x, y, z)$  における速度を  $\mathbf{v}$  とするとき,  $\mathbf{v} = \boldsymbol{\Omega} \times \mathbf{r}$  を示せ．
- (2)  $\boldsymbol{\Omega} = \frac{1}{2} \text{rot } \mathbf{v}$  を示せ．